

序

わが国では、同じ疾患に対する治療薬でも作用機序の異なるものや同じ系統の類似薬が多数存在するために、どの薬を選べばよいか迷うことがあります。このような類似薬を選択するときの参考書として、2009年に『類似薬の使い分け』(羊土社)を出版しました。この『類似薬の使い分け』では、主に高血圧、糖尿病、脂質異常症などの疾患を取り上げ、それぞれの疾患を治療する際の類似薬の使い分けを解説し、幸いにも好評を博しました。さらに研修医の方々を中心に、「診療の現場で日常的に使用される頻用薬の使い分けも知りたい」という意見が数多く寄せられました。

そこで本書では、日常診療で患者さんがしばしば訴える症状を選び、これらの症状を治療するために用いる薬の使い分けを解説しました。具体的には、頭痛、めまい、吐き気、便秘、痒みなどの症状を取り上げ、最初に各症状を訴えたときの鑑別診断をまとめました。次いで鑑別診断に基づいた薬の使い分けを具体的な症例をもとにして解説しました。執筆者はいずれも経験の豊かな臨床医であり、個々の患者さんに対する頻用薬の使い分けについて現場に即した内容になっています。

薬の有害反応が毎年数多く厚生労働省に報告されており、ときには生命が脅かされるような重篤なものもあるために、各臨床医にはより適正に薬を使用することが求められています。すでに出版しました『類似薬の使い分け』、および本書『症状と患者背景にあわせた頻用薬の使い分け』が薬の適正使用の推進に役に立ち、薬の有害反応が少なくなれば望外の喜びです。

最後に、本書の出版に熱い情熱を注いでいただきました羊土社編集部の秋本佳子様、溝井レナ様に厚くお礼申し上げます。

2010年6月

藤村昭夫